

## もくじ

▽国際会議	1
▽大会報告	2
▽受賞者のことば	3
▽学会動静	8
▽ from Editors	8

### 【国際会議】

#### 第 12 回国際生理人類学会議 (ICPA2015)

##### 最終案内

会議長 勝浦哲夫

ICPA2015 の開催まであと 2 ヶ月程に迫ってまいりました。皆様からの多数の演題登録がありましたことをたいへんうれしく思っています。現在、組織委員会などで開催のための最終的な作業に総力を挙げて取り組んでいます。詳細は ICPA2015 のホームページで公開致しておりますのでご覧下さい。(http://web.apollon.nta.co.jp/icpa2015/)

多くの皆様のご参加をお待ちしています。

**会期**：2015 年 10 月 27 日(火)～30 日(金)

**会場**：東京ベイ幕張ホール

(千葉県美浜区：JR 京葉線海浜幕張駅下車  
徒歩 5 分

<http://www.makuharihall.net/index.html>)

**参加登録締切**：2015 年 9 月 30 日

(会員\*：50,000 円，学生会員\*：30,000 円)

\*日本生理人類学会および協賛学会の会員

### プログラム概要

10 月 27 日

参加登録

若手研究者研究交流会

歴代 IAPA 会長記念講演会 (Invited speakers:

Prof. Hans W. Jürgens, Prof. Pavao Rudan,

Prof. C.G.N. Mascie-Taylor)

ウエルカムレセプション

10 月 28 日

開会式

セッション 1 (Human Variation in  
Environmental Adaptation; Invited speakers:

Dr. Saša Missoni, Prof. Douglas E. Crews)

セッション 2 (Anthropology for Biological  
Locomotion; Invited speaker: Dr. Herman  
Pontzer)

ポスターセッション 1

特別講演 (Prof. Semir Zeki) 【一般公開】

セッション 3 (Adaptability and Human Brain  
Function)

10 月 29 日

セッション 4 (Human Phenotype and Genetic  
Variation; Invited speakers: Dr. Yee How Say,  
Dr. Fook Tim Chew)

セッション 5 (Human Nutrition; Invited  
speaker: Dr. Alan C. Logan)

ポスターセッション 2

セッション 6 (Adaptability to Lighting  
Environment; Invited speakers: Dr. Claude  
Gronfier, Dr. Kathryn Roecklein)

懇親会

10 月 30 日

セッション 7 (Adaptability to Cold  
Environment; Invited speaker: Dr. Tiina  
Ikäheimo, Dr. Joo-Young Lee)

セッション 8 (Methodological Study of  
Circulation; Invited speakers: Prof. Junichiro  
Hayano, Dr. J. Andrew Taylor, Dr. Can Ozan  
Tan)

ポスターセッション 3

セッション 9 (Techno-Adaptability to Modern  
Society; Invited speaker: Dr. Sung-Phil Kim,  
Dr. Oh-Sang Kwon)

閉会式

エクスカージョン

## 【大会報告】

### 日本生理人類学会第72回大会 終了報告 大会長 山内太郎（北海道大学）

平成27年5月30日、31日の両日におきまして第72回大会を開催いたしました。初日の夕方から生憎の雨模様となりましたが、2日目は上がり、無事に開催することができました。前日には若手の会が開催され、懇親会も合わせて有意義な交流が行われました。また、大会2日目に恒例の総会と、学会各賞の授賞式も行われました。



特別講演者の京都大学総長、山極壽一先生を囲んで

本大会では一般演題として57演題の申し込みをいただきました。さらに、特別講演と2つのシンポジウムを企画いたしました。特別講演は、京都大学総長の山極壽一先生に「家族の由来と未来—ゴリラの社会から考える—」と題してご講演いただきました。ゴリラの社会から現代社会まで話題は広く深く、思わず時間を忘れてしまうほど、エネルギー溢れる語り的魅力に魅了されました。人類学研究交流会のシンポジウムとして「狩猟採集民の



シンポジウム「狩猟採集民の人類学」総合討論



受賞者の先生方（総会の授賞式にて）

人類学」(座長：安河内 朗先生(九州大学))と題して、生理人類学から樋口重和先生(九州大学)、形質人類学から深瀬 均先生(北海道大学)、遺伝人類学から太田博樹先生(北里大学)、そして生態人類学から山内太郎(北海道大学)が登場しました。狩猟採集民という人類学者にとって興味が尽きないテーマについて自然人類学の各分野の第一線の研究者が自由に語り、生理人類学の可能性と未来についても議論されました。また、将来を期待される若手の研究者によるシンポジウムとして「代謝機能からみた全身的協関と適応能」(座長：前田享史先生(九州大学))と題して、熊原秀晃先生(中村学園大学)に身体活動について、緑川泰史先生(桜美林大学)に身体組成について、米代武司先生(北海道大学)に褐色脂肪細胞について、そして若林 斉先生(千葉工業大学)に骨格筋代謝について最新の知見を講演していただきました。このたびの特別講演およびシンポジウムをきっかけとして、生理人類学の足元を見つめなおし、同時に隣接分野と積極的に協働しながら生理人類学が発展することを願ってやみません。

今回の大会は北海道大学のみならず、天使大学・天使病院にもご協力をいただきました。懇親会は、北海道各地の味覚を取り揃えました。道産の飲料とともに、きれいで見晴らしの良い天使ホールで食事と歓談をお楽しみいただけただけなのではないかと思えます。

2日間の短い大会期間ではありましたが、有意義な時間をお過ごしいただくことができましたなら幸甚でございます。本大会の開催に関してご協力とご支援を賜りました全ての皆様へ感謝申し上げます。ICPA2015ならびに第73回大会にてお目にかかれまことを楽しみにしております。

## 【受賞者のことば】

### 学会各賞受賞者のことば

#### 学会賞を受賞して

原田 一（東北工業大学）



この度は、荣誉ある学会賞を賜り、誠に光栄に存じます。勝浦哲夫学会長ならびに審査委員の先生方、ご推薦いただいた会員の皆様に心より感謝申し上げます。

私は、本学会の前身である生理人類学懇話会発足当時より関わっておりますが、本学会には36年間程お世話になってきました。1983年に生理人類学研究会、1987年に生理人類学会と改称されましたが、この間、所属していた職場の都合上、本学会との関わりもやや希薄になっておりました。1992年秋に退職し、当時菊池安行先生が主宰されておりました千葉大学工学部人間工学教室（現人間生活工学研究室）にお世話になることになりました。

生理人類学会は1993年に日本生理人類学会と改称されましたが、1994年ドイツのキール大学にてユルゲンス先生を会議長として、第2回国際生理人類学会議が開催されて以降、私は国際会議のお世話をさせていただくこととなりました。キールでの国際会議では、学生さんの発表も多く、生理人類学の国際的活動に勢いがあったことを思い出します。これまでインターコンGRESSを含めて、第2回以降11回の国際会議が開催されておりますが、このところ国際会議開催地候補となった先生を訪ねて根回しをしても、何とか会議開催にこぎつけるということもあれば、ドタキャンもあり、日程調整、プログラム作成などにおける不備があり、会員の皆様には多大なるご迷惑とご心配をお掛けいたしましたこと申し訳なく思っております。

最近では本学会の国内大会および国際生理人類

学会議において、若手の研究者が躍進しており、私が面識のあった先生方も少なくなっていることを思うと、私もそろそろフェイドアウトの時期が近付いて来ているのではないかと予感しているところです。

国際担当としては、恒次祐子先生（森林総合研究所）、山内太郎先生（北海道大学大学院保健科学研究所）と私の3人体制で今期をスタートすることとなり、心強く思っております。もう暫くの間、皆様方にご協力いただきながら、より一層の努力を重ね本学会の発展のためのお手伝いをさせていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



#### 日本生理人類学会論文大賞を受賞して

青柳 潔（長崎大学）



72回大会総会で2014年日本生理人類学会論文大賞を受賞させて頂きました。感謝申し上げます。

JPAには、2002年から2014年の12年間で10本の論文が掲載されました。最初に掲載された論文は、2002年に発表された「Body mass index, physical activity, dietary intake, serum lipids and blood pressure of middle-aged Japanese women living in a community in the Goto archipelago. Ohmura S, Aoyagi K, et al.」です。本土に比べ死亡率が高い離島（長崎県五島列島）在住女性を対象に体格、身体活動、食事、血清脂質、血圧の調査をし、日本人サンプル（国民栄養調査）と比較しました。離島の肥満女性では血清コレステロールと拡張期血圧が高くなっていました。

2004年に「Secular trends of sizes at birth in Japanese healthy infants born between 1962 and 1988. Oishi K, Aoyagi K, et al. 2004」が発表されました。わが国は1960年頃より高度経済成長期に入り、ライフスタイルが欧米化してきました。その時期の出生時体格の経年変化を検討しました。身長・

体重は 60 年代から 70 年代にかけて増加し、70 年代と 80 年代には違いはありませんでした。一方、頭囲と胸囲は 60 年代から 70 年代にかけて増加しましたが、80 年代では減少していました。社会経済状況の改善といった環境変化は児の成長に影響する可能性を示唆しました。光栄なことに本論文は 2004 年度の優秀論文賞に選ばれました。

2006 年に「Obesity and cardiovascular risk factors among men and women aged 40 years and older in a rural area of Japan. Aoyagi K, et al.」が発表されました。肥満は一般的にみられる健康問題で、世界的に注目されています。地域在住男女を対象に肥満と心血管リスクファクターとの関連を調べたところ、肥満は、糖尿病と脂質異常と関連していました。日本では肥満者は欧米に比べ少ないものの、日本においても心血管病の予防のためには肥満対策が大切なことを示しました。

2014 年に「Mental health problems and influencing factors in Japanese women 4 months after delivery. Yamamoto N, Aoyagi K, et al.」が発表されました。出産後 4 ヶ月の母親のメンタルヘルスの研究を行いました。GHQ-12 高得点 (4 点以上) をメンタルヘルス不調と定義した場合、7.7 % の母親がメンタルヘルス不調でした。メンタルヘルス不調に関連する項目を持つ母親への支援の必要性を示しました。

今後も生理人類学研究に邁進し、多くの論文を JPA に投稿できたらと考えています。



### 優秀研究賞を頂いて

樋口重和 (九州大学)



この度、このような名誉ある賞を頂き誠に有難うございます。優秀研究賞は今回初めて制定された賞で、それを最初に頂けたことをとても光栄に思います。それと同時に今後への責任も感じています。思い起こせば、日本生理人類学会から最初

に賞を頂いたのは今から 18 年も前のこととなります。博士課程での研究を学会誌に投稿した論文で奨励賞を頂きました。その時に頂いたものは砥石でした。砥石に金色のプレートが貼ってあるというものでした (写真手前)。当時はデザインが毎回変わっていたと記憶しています。したがって、この砥石を持っているのは数名しかいないと思います。何よりもそこに込められた意図 (「自分を砥ぎ続けよ!」) は、博士の学位を取得したての自分にはとても励みになりました。また、そのおかげで今でも光の生理作用の研究を地道に続けられていると思います。

一方で、今回頂いた盾には彫刻家の中垣克久氏による作品が中央に配されています (写真奥)。オリーブの枝とありますが、それをつかむ男女の姿はとても美しく、躍動的です。現在私はユーザー感性学専攻というところで感性をテーマに大学院の教育研究も行っています。最近、彫刻作品を使った研究も行っています。彫刻作品の中の動きの印象 (インプライドモーション) を脳波によって測定し、それが模倣体験などでどのように変化するかという試みです。受賞式で盾の中の躍動的な男女を見た瞬間から、これを題材に脳の反応を測定してみたいという衝動に駆られています。いつかその研究成果を学会で発表できればと思います。

最後に、今まで私を支えてくれた多くの先生方、先輩、後輩、学生諸氏、そして家族に感謝します。今後は「堅い砥石」と「軽やかで躍動的な盾」の両方を眺めながら生理人類学の研究と教育に励みたいと思います。



### Dear President and Colleagues

("Fermented food, microbioita, and mental health: ancient practice meets nutritional psychiatry"が優秀論文賞に選ばれたことに対して、corresponding author の A. C. Logan 氏から寄せられた e-mail)

On behalf of my colleagues Dr. Eva Selhub and Dr. Alison Basted, I would like to express my deepest appreciation to the Japanese Society of Physiological Anthropology and the Editors of the Journal of Physiological Anthropology.

Through the tireless work of *The Society* and its leadership, the *Journal of Physiological Anthropology* has become a central hub for research concerning the causes and solutions to some of the most pressing issues of our time.

*The Society* has welcomed research from unique viewpoints, and fully understands that many of the complicated problems we face in the 21st century will require inter-disciplinary approaches. In 2014, *The Journal* was home to dozens of ground-breaking studies; simply to be associated with these studies, to be published alongside them, is *The Award*.

With Respect and Appreciation

Alan



### 優秀論文賞を受賞して

石橋圭太（千葉大学）



このたびは名誉ある賞を頂き大変感謝申し上げます。賞を頂いた論文（日本生理人類学会誌 19 巻 4 号掲載）は正弦波下半身陰圧負荷（SLBNP）を用いて行った研究で、下半身への血液移動を動的に変化させたときの前頭部の NIRS 信号の振る舞いをあつかったものです。研究室での岩永光一教授との研究のキーワードの一つが「脳を含んだ循環系の全身的協関」でしたので、それまで自分自身の研究対象としてはあつかつてこなかった、頸から上の反応をとらえることにトライする必要性がありました。当初は脳の血液循環を研究対象にするのはハードルが高すぎるのではないかとこの足を踏んでおりましたが、言われるままに飛び込んでみると、いまだ五里霧中ではありますが、確かに新しい世界が広がっているように感じています。

NIRS に関してはそれまであつかったことはなかったのですが、共同研究者として森林総合研究所の恒次祐子氏に加わっていただきました。当初は

NIRS に加えて、経頭蓋超音波ドップラー法を用いた中大脳動脈血流速も対象としておりましたが、こちらの測定は当時研究室としてノウハウがなく共著者の大高雅貴君と悪戦苦闘しておりました。研究室としてまずは NIRS 信号のデータを先にまとめてみてはということで、金沢での第 68 回大会にて発表いたしましたところ、編集委員の先生から和文誌への投稿をお声がけいただき、論文としてなんとか仕上げることができました。

前頭部の NIRS 信号への脳の活動に由来しない全身性信号の影響については、プローブ直下の皮膚血流の影響に関して多くの報告がなされておりましたが、頭を前に傾げるだけでも NIRS 信号が大きく動くので SLBNP に対しても変動するのではないかとある程度は予想しておりました。しかしながら、実際に測定してみると NIRS 信号が SLBNP に対して予想以上に顕著に同期して変動するので、測定中は生波形を飽きることなくながめておりました。

SLBNP を用いた研究はまだいろいろな可能性があるように感じておりますが、自作の制御装置のため安全性を考えると学生に実験を任せっきりというわけにもいかず、牛歩のような進捗状況ですが、これからもいろいろとトライしていきたいと考えております。



### 優秀論文賞を受賞して

竹内弥彦（千葉県立保健医療大学）

この度は、日本生理人類学会誌 Vol.19 に掲載された、我々の論文「高齢者の脊柱形態と静止立位中の体節別および全身重心動揺との関係」に対し、2014 年度日本生理人類学会優秀論文賞の栄誉を賜り、誠にありがとうございます。大変光栄に感じますとともに、身の引き締まる思いです。ここ最近では、自身の研究能力やその方向性に迷いを感じていたこともあり、この度の受賞は大変に励みになりました。ご選考いただきました関係各位に心より感謝を申し上げます。

賞をいただいた論文は、高齢者の姿勢変化の特徴である脊柱の形態、とくに胸椎の後彎角度と身体体節ごとの重心動揺との関連性に着目し、胸椎の後彎角と頭部および全身の重心動揺との関係を

明らかにした研究です。私自身は、障害を有する方のリハビリテーションや高齢者の介護予防事業に従事する理学療法士という職務に就いております。これまで、高齢者の姿勢や運動について、主にバイオメカニクスの観点から研究を進めて参りましたので、生理人類学会が解明目的としている5つのキーワードに当てはまっていないのではないかと不安をもちつつも、人間生活の質の向上に直接関わり、幅広い視点からヒトの生理特性を解明する生理人類学会に魅力を感じ、細々と学会誌への投稿を続けさせていただきました。

この度、栄えある優秀論文賞を受賞できたのも、他分野の私を快く受け入れて下さった、大学院時代の恩師である勝浦哲夫先生（千葉大学）と下村義弘先生（千葉大学）のご指導のおかげであると、心より感謝している次第です。この度の受賞を励みとして、今後も人間生活の質の向上に少しでも貢献できるよう、一層の精進を重ねて参ります。



#### 日本生理人類学会論文奨励賞を受賞して 若林 斉（千葉工業大学）



このたび、平成26年度日本生理人類学会論文奨励賞という栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。学会関係各位に深く感謝申し上げます。

今回、賞を頂いた論文は、Journal of Physiological Anthropology Vol.33に掲載された「A comparison of hydration effect on body fluid and temperature regulation between Malaysian and Japanese males exercising at mild dehydration in humid heat」で、マレーシア人と日本人を対象に、暑熱環境での運動時に水分補給を行った際の体水分・体温調節反応の比較を行いました。その結果、両群とも水分補給により発汗量が増加するものの、日本人に比べてマレーシア人の方が水分補給条件での体重減少量が小さいことが示されました。また、マレーシア人のみ水分補給により有意に血漿量の減少が

抑えられ、深部体温の上昇も抑えられました。これらの結果から、暑熱下運動時の水分補給の影響として、熱帯地で生育した長期暑熱適応者では体水分のロスを抑えつつ、少ない発汗量で効率的な体温調節を行っていることが示唆されました。

本研究は私が九州大学でポスドクをしていた時に行った研究で、日本（栃原 裕先生、橋口暢子先生）、韓国（JooYoung Lee 先生）、マレーシア（Mohamed Saat 先生）、インドネシア（Titus Wijayanto 先生）の研究者による国際共同研究として行われました。私がこれまでに携わった中で最大規模の研究プロジェクトで、また、論文の執筆までに最も時間がかかった研究ですので、大変思い入れの強い研究です。体水分調節を含めた暑熱環境での体温調節機能とその適応について研究領域を広げるとともに、生理人類学のキーワードのうち「環境適応能」、「生理的多型性」、「全身的協働」について私の理解を深めることにつながりました。本論文を評価していただいた日本生理人類学会関係各位に改めて感謝を申し上げます。また、このような研究の機会をくださり、論文になるまで辛抱強くご指導いただきました栃原裕先生に感謝申し上げます。



#### 温度感覚からみたヒトの体温調節反応 足利さくら（長崎大学）

この度は、第71回大会優秀発表賞という名誉ある賞を賜り、大変光栄に思います。本研究にご協力頂いた被験者の皆様、研究室の皆様にご心から御礼申し上げます。今回賞を頂きました研究は、局所寒冷負荷時の温度感覚に着目し被験者を4つのグループに分け、局所寒冷血管拡張反応（CIVD; Cold-induced vasodilation）を新たな視点から検討するものでした。CIVDはヒトの耐寒性と関係があるとされており先行研究も多く存在しますが、主観的指標である温度感覚との関係に着目したものは少なく、本研究を進めることで温度感覚を局所寒冷負荷実験の一つの分析指標として確立することを目指しています。まだまだ勉強不足な点もありますが、発表時に頂いた質問、アドバイスを活かし今後もより一層精進していきたいと考えております。ありがとうございました。

**時計遺伝子を指標とする  
男子大学生の体内時計アセスメント  
出口美輪子（大阪市立大学）**

この度は、このような栄誉ある賞（第 71 回大会優秀発表賞）を賜り、大変に光栄に思います。本研究は、ヒトの体内時計を評価することを目的に、毛根に付着する毛包細胞の RNA を用いて、時計遺伝子の発現リズムを評価しました。3 時間毎に毛包細胞を採取することは根気のいる作業でしたが、その分、毛包細胞の時計遺伝子の発現リズムが、ヒトの体内時計を解析する上で有用であることを示せた時の喜びは一入でした。

体内時計の攪乱は、メタボリック症候群の発症増加の原因の一つと考えられています。この解析法は、体内時計の異常を把握し、それに基づく疾患予防や栄養療法を実施するための基礎的知見を提供できると期待しております。まだまだ研究者として未熟者ではありますが、今回頂いた賞を励みに、より一層研究に精進していきます。

最後になりましたが、いつも親身にご指導くださる佐伯先生、金先生、本研究にご協力頂いた皆様に深く御礼申し上げます。



**人類進化と熱帯熱マラリア原虫の  
EBA-175 遺伝的多型  
安河内彦輝（東京大学）**

この度は第 71 回大会優秀発表賞という大変な栄誉ある賞を賜り、誠に光栄です。本研究の血液試料を提供いただいた患者の皆様、研究に協力くださった東京大学のヒトゲノム多様性研究室およびマヒドン大学の共同研究者の皆様にご心より感謝申し上げます。

今回の発表では、人類進化が熱帯熱マラリア原虫の赤血球結合分子 EBA-175 の遺伝的多型に及ぼした影響を評価しました。本研究から、現存するマラリア原虫集団は、10 - 5 万年前に起きたヒトの脱アフリカ以降の急激な人口増加の影響で、その遺伝的多様性が増加し、ヒトと原虫の間で進化的軍拡競争が繰り広げられてきたことが示唆されました。

私は本来ヒトを対象に、分子レベルで人類進化

を理解しようと研究を行っています。進化という観点から、私の研究キャリアが皆様の研究のお役に立てることもあると思っています。今回の受賞を励みに、今後も努力を重ね、生理人類学の発展に貢献できるよう精進していく所存です。この度は、どうもありがとうございました。

---

**Journal of Physiological Anthropology  
Best Reviewer Award 受賞者のことば**

---

**2014 Best Reviewer Award を受賞して  
向江秀之（株豊田中央研究所）**



この度は、Best Reviewer Award という名誉な賞を頂き、誠にありがとうございます。今回の受賞を励みに、より一層精進していきたいと思えます。

さて私は、企業人であり、論文を書くのも読むのも大学の先生方には遠く及びません。そのような私に査読が回ってきますと、私で良いのか？と自問しつつ引き受けてしまい、英語と格闘するパターンに陥っています。ちなみに 2014 年に査読した論文を数えてみると、6 編！もありました。1 つが終わるとすぐ次が来た、と言う慌しい感じであったことを覚えています。

この査読にて、私が重視していることは 2 つあります。1 つ目は企業の視点なのですが、「なぜ」の部分です。特に序論の「なぜ」この研究に着目したか（なぜ必要か）？のところですか。ここが曖昧だと、実験方法が適切かどうか判断できません。また査読者は、必ずしもその研究領域に精通しているわけでは無いので、この部分が明確だと、内容を理解してもらいやすくなると思います。

そして 2 つ目は、生理人類学的な視点として、ヒトのメカニズムとしての考察があるかどうか、です。時折、「やった」「出来た」のみの論文がありますので、ヒトの視点からの考察を広げるよう

にリクエストしています。

その一方で、他の査読者のコメントに感心することも多く、大変勉強になっています。このような悩み多き査読者ですが、今後ともよろしくお願ひいたします。どうもありがとうございました。

## 【学会動静】

### 2014 年度日本生理人類学会功績賞

第 72 回大会時に開催された総会において、以下の 11 名の方々に「功績賞」が授与されました。

飯塚幸子	石井 勝	大野静枝
片岡洵子	加地正郎	菊池安行
竹本泰一郎	田中正敏	田村照子
中根芳一	吉田敬一	

(敬称略, 五十音順)

## 研究助成担当からのお知らせ

### 研究助成担当理事

北村真吾 (国立精神・神経医療研究センター)

樋口重和 (九州大学)

## 若手研究者のための研究助成金制度の紹介

本年度より若手研究者のための研究助成金制度が制定されました。この制度は若手研究者の育成を目的として、科研費申請内容が生理人類学的研究であり、かつ、科研費に応募したが、採択されなかった日本生理人類学会会員を対象として研究費を助成する本学会独自のものです。助成対象となる科研費の種別・金額・採択件数の内訳は下記の通りです。

(研究助成金内訳)

若手研究 A : 20 万円, 1 ~ 2 件

若手研究 B : 10 万円, 1 ~ 2 件

基盤研究 C : 15 万円, 1 件

(※若手 A / B を合わせて 3 件以内)

本年度もすでに審査が終了し、計 4 件(若手 A : 1 件, 若手 B : 2 件, 基盤 C : 1 件)の生理人類学的研究に助成が決定しました。

本助成金は科研費申請が残念ながら採択に至らない場合でも研究の開始・継続をサポートする制度であり、研究活動費が潤沢とはいえない若手研究者のみなさんにぜひ活用いただきたいと思ひます。本助成金では生理人類学的視点が評価対象となりますので、生理人類学をキーワードとしている科研費細目に応募いただくと結果的に本助成金採択の可能性も高まり効率的です。

本助成金は来年度以降も継続して実施する予定ですので、会員みなさんの積極的な活用を期待しています。

## 来年度科研費について

本年も科研費申請の時期が近づいてきました。すでにご存知の方もいるかと思いますが、科研費の「系・分野・分科・細目表」について大幅な見直しの審議が行われており、平成 30 年度公募から適用される見通しです。現行の枠組みでの申請は今年 (28 年度分) と来年 (29 年度分) の 2 回を残すのみとなっています。見直しの結果がどうなるかはまだわかりませんが、現在の応用人類学細目がさらに発展するためには、より多くの申請が望まれます。会員のみなさんの積極的な申請をぜひお願い致します。

## from Editors

次号 No.4 の原稿締切は 2015 年 11 月 1 日です

▽今号は受賞者の皆様のコメントを満載致しました。ヒトの人類学的特質の解明に対して「もう一歩、あと少し先へ」と迫り続けている諸先生方の求道精神に深く感慨しているところです。

▽会報担当理事を拝命し、今号より PANews の編集を担当することになった仲村です。2013 年度まで PANews づくりを担当しておりましたが、2 年間学会ホームページのお世話をし、このたび出戻って来ました。相方は当時と同じ安陪先生で、心強い限りです。引き続き魅力的な誌面作りを心がけますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

▽今号には学生会員の方々からの記事が沢山掲載されております。ところが、学生会員には和文誌が配付されませんので、同世代の記事が掲載されていても目にすることができません。幸い PANews は学会ホームページにアーカイブされておりますので、指導教員の先生におかれましては、学生の方々にそのことを是非お伝えください。ウェブ版の図版の多くはカラーで、生き生きした誌面をご覧ください。

## ▽ PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター

仲村 匡司 京都大学大学院 農学研究科

メールアドレス [panews@jspa.net](mailto:panews@jspa.net)

※原稿、お問い合わせなどはこのメールアドレス宛にお送りください。